

『日本家政学会誌』における食文化関連論文の年代別分析
『生活学』、『風俗』との比較を通して

桑畑美沙子（熊本大）

目的：家政学会誌，生活学および風俗から検索した食文化関連論文の研究手法・研究内容
研究対象を年代別に検討し，家政学会における食文化研究の課題を明らかにしたい。

方法：95年までの家政誌（51年～），生活学（75年～）および風俗（62年～）の食文化関連論文を対象に，研究手法と統計的処理の有無，研究内容，および研究対象として選定されている地域・階層・時代の視角の明確さを検討した。

結果：①食文化関連論文は，生活学（41編）で17～34%，風俗（76編）で12～27%であったが，家政誌（報文81編，資料31編，ノート2編）では1～5%とどの年代も少なかった。②研究手法は，風俗ではどの年代も88%～100%が文字資料であったが，家政誌と生活学は年代によって異なり，アンケート・文字資料・聞きとりが比較的多かった。特に家政誌は年代によって変化し，70年代までアンケートが90%前後であったが，80年代に文字資料が多くなり，90年代に聞きとりも増えてきていた。③統計的処理は，どの年代も，風俗では全くなされていなかったが，家政誌では有意差検定が，生活学では多変量解析が20～40%でなされていた。④研究内容は，3誌ともどの年代も食行動が85～100%であった。⑤どの年代も，対象としている時代や地域の視角が明確な論文は風俗と生活学では多く，家政誌では半数以下であったが，階層の視角が明確な論文は3誌とも多くなかった。

以上のことから，家政誌の食文化研究は種々の方法で研究されるようになってきているが，今後，さらに①他分野の研究と比肩できるように食文化に関する研究を活性化すること，②明確な視角で研究対象を選定することが必要であるといえよう。